

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care



NASHIM

Vol.44
2018

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信

Contents

- カザフスタンへ専門家派遣
- チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へのヒバクシャ医療研修
- 出前講座を実施しました



研修中のチェルノブイリ・カザフスタン関連国医師がNASHIM会長、指導教授とともに知事を表敬訪問
(長崎県庁にて)

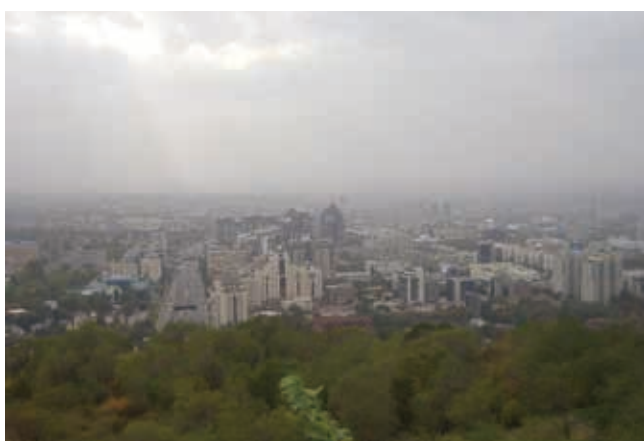
カザフスタン訪問記2018

長崎大学原爆後障害医療研究所・助教 **折田真紀子**

【日程概要】

- 9/11 長崎を出発し福岡国際空港から出発（深夜アルマティ市到着）
- 9/12 国立カザフスタン医科大学（アルマティ市）での講義
- 9/13 アルマティ市からセメイ市へ移動、セメイ医科大学での講義
- 9/14 セメイがんセンター訪問、セミパラチンスク旧核実験場視察
- 9/15 セメイ市よりウスチカメノゴルスク市へ移動
- 9/16 ウスチカメノゴルスク市よりアルマティ市へ移動、帰国
- 9/17 福岡国際空港到着後、長崎へ

はじめに、今回カザフスタン共和国への訪問という貴重な機会をいただき、NASHIM事業関係者の皆様に心から感謝申し上げます。私にとって、今回は2度目のカザフスタン訪問となりました。私は普段、保健師として、また長崎大学原爆後障害医療研究所（原研）の助教として、福島県にある長崎大学・川内村富岡町復興推進拠点で活動しています。福島県川内村や富岡町はいずれも、2011年の福島原発事故後の影響を受け、一時は全域避難を余儀なくされた地域です。現在では、一部の地域を残して町への帰還が可能となっていますが、放射線健康リスクに対する住民の懸念は残っており、私たちは住民との放射線健康リスクコミュニケーションを通じた地域支援活動や環境放射能評価、放射線リスク認知調査をおこなっています。



アルマティの市街地を丘の上から見たところ



高村教授（右）と折田助教（左）
国立カザフスタン医科大学（アルマティ市）にて

今回、原研国際の高村昇教授、NASHIM事務局の中島勝也氏とカザフスタン共和国を訪問した主な目的は、各機関との継続的な連携強化、災害・被ばく医療に関しての大学生との意見交換、セミパラチンスク旧核実験場（ポリゴン）を視察することでした。



博物館内の核実験場模型（クルチャトフ市）



旧核実験場に残るモニタリング塔

9月14日に、私は人生で初めてとなる、セミパラチンスク旧核実験場を訪問しました。旧核実験場への道のりは遠く、セメイ市から車で西へ約150km走り、まずクルチャトフ市へ到着します。以前は秘密都市でしたが、実験場の閉鎖後に、核実験場での核実験を最初に指導したクルチャトフ氏の名が都市名として充てられています。現在は、旧核実験場への入り口の街であり、博物館が併設されています。博物館で担当者が概要を説明した後、車を乗り換え、さらに約60km離れた核実験場へ向かいます。見渡す限り乾燥した草原が続き、その中で核実験場へ続く一本道が長く伸びています。整備されているとは言えない道を、慣れた運転手は道路の状況に合わせて減速加速を繰り返します。あまりの揺れの大きさに、私は椅子から振り落とされたほどです。核実験場2kmほど手前に至ると、当時のモニタリング塔が残っており、等間隔に爆心地に向かって建っています。モニタリング塔を横目に爆心地へ車で向かうと、500mほど手前から手に持っていた線量計の値がいきなり急上昇しました。ここに至るまでは、1時間当たり0.04マイクロシーベルトほどだった空間線量率が、爆発地点では4-8マイクロシーベルトへ上昇しました。地上核実験を行った1949年以降、地上高さ30mほどの塔が建てられ、最上部に核爆弾を装置し、爆発させてきたそうです。爆心地付近の比較的高い線量は、現存する放射性物質の影響や、中性子等の照射を受けた物質が放射性物質に変化したことによるものと考えられますが、この地が経験してきた当時の悲劇を思うと、悲しさが込み上げてきました。



空間放射線量率を測定する折田助教（左から2人目）



爆心地近くに立つ高村教授

現在爆心地を訪れても被ばくする線量は限られており、滞在によって健康影響が起こることはありませんが、この教訓を次の世代へと受け継いでいくことが大切だと考えられます。核実験場が1991年に閉鎖されるまで、450回を超える核実験が繰り返され、その周辺に生活していた住民の皆さんが、どのくらい

の線量を受けたのかは、現在に至るまで正確に評価することはできません。そのような困難の中で、これまで住民の方への医療や保健衛生活動を提供してきたすべての医療者の方々に尊敬の念を抱くとともに、私はNASHIM事業が果たしてきた役割の大きさを知りました。



講義後、学生の皆さんと（国立カザフスタン医科大学）



国立カザフスタン医科大学学長（左から2人目）と面会

カザフスタンと長崎大学、NASHIMの関係は、アリポフ・ガビット先生が本学の原研病理の関根一郎名誉教授、中島正洋教授のもとに国費留学生として学び、その後山下俊一学長特別補佐がセメイ市を訪れたことから始まったと伺いました。原研国際の高村昇教授も、山下俊一先生の教室の大学院生だった1996年に初めてカザフスタンを訪れ、社会医学の重要性に気づかされ、それ以来両国の連携に携わっています。今回の訪問では9月12日にアルマティ市の国立カザフスタン医科大学、9月13、14日にセメイ医科大学、セメイがんセンターを訪問しました。国立カザフスタン医科大学、セメイ医科大学の両大学では、学部学生への講義、意見交換を行いました。両大学とも30名を超える学部学生が熱心に参加し、私も福島での活動の経験から、災害・被ばく医療学分野での医療者のリスクコミュニケーションの大切さについて講義を行いました。参加した学生からは、「福島でのリスクコミュニケーション活動で一番困難なことは何か」等の質問をされるなど、大変有意義な議論となりました。両大学とも講義は英語で行いましたが、学生は通訳なしで参加して議論にも参加するなど、レベルの高い国際化教育が推進されていることを実感しました。またセメイ医科大学では、ジュヌソフ学長、デュスポス国際担当副学長ご臨席の元、第19回長崎医学賞（長崎大学医学部国際学生奨励賞）が2名の学生に授与されました。



講義の様子（セメイ医科大学）



第19回長崎医学賞を授与された学生（左の2名）

一方、セメイがんセンターを訪れた折には、サンディバエフ院長先生から高村教授へ日ごろからの連携の成果に対する謝辞に加えてこれからのさらなる連携強化への期待が述べられ、現地における病理学領域や核医学領域に対するNASHIMへの大きな期待を感じました。その後は、今年度のNASHIM研修に参加されたベケトワ・バヤン先生が院内を案内してくださり、私はこれまで病理学分野での強固な連携が継続していることを知りました。



セメイがんセンターで サンディバエフ所長（左から3人目）とベケトワ副所長（右から2人目）



前列右がアスタナ医科大学ラヒプベコフ理事長

滞在最終日には、アルマティ市にてアスタナ医科大学の理事長であるラヒプベコフ先生が昼食に招待してくださいました。先生は、2か月前に自らが先頭に立って、新組織となるNational Society for Primary Health Careを立ち上げ、今後は総合診療学領域、家庭医学分野や福祉保健学分野での国内外の関係機関との連携強化を模索されているということで、9月17、18日には、National Society for PHCの設立式、キックオフシンポジウムが予定されていることを話してくださいました。



レーニン像（セメイ市）



セメイ医科大学近くのアフガニスタン派遣兵士慰霊碑

9月11日に出国し、17日に帰国する、あっという間の1週間でしたが、カザフスタン共和国でのNASHIM事業が果たしている役割の重要性を直接感じる事ができました。原研の一員として、NASHIMという力強い連携の中で先生方が活躍されてきたことを忘れずに、日々の地域支援活動や放射線健康リスクに関する研究活動に取り組んでいきたいと思っております。このような貴重な機会を与您いただき、誠にありがとうございました。

チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師への ヒバクシャ医療研修を実施しました



歓迎レセプションにおいて紹介される研修生6名

NASHIMでは、平成5年度からロシア、ウクライナ、ベラルーシなどのチェルノブイリ原発事故周辺諸国や旧ソ連の核実験場があったカザフスタンで放射線ヒバクシャの治療にあたる医療従事者に対する指導、技術援助や医療情報提供を行うため、関係機関の協力を得て、独自に医師等の研修生を受け入れています。

今回は6名の医師を招き、7月16日から8月17日までの約1ヶ月間のヒバクシャ医療研修を行いました。研修期間中には長崎大学や長崎大学病院での講義等に加え、長崎原爆資料館や追悼平和祈念館の見学、平和祈念式典への参列など、長崎原爆の実相について学び、日赤長崎原爆病院、放射線影響研究所長崎、長崎市原爆被爆者健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホームなどへの視察訪問を通して、日本の原爆被爆者への援護ケアについても理解を深めました。

今年度までに受け入れた研修生は、指導してくださる先生方や関係機関の皆様のお陰をもちまして、160名となり、帰国後は母国で大いに活躍していただいています。

【日程概要】

- 7/16 長崎へ到着
- 7/17～8/ 2 関係先訪問・見学、長崎大学等での合同研修
- 8/ 3～8/16 長崎大学・長崎大学病院での専門研修（8/9は平和祈念式典参列）
- 8/17 長崎から帰国

【研修生名簿】 苗字 名前

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| 1. コズローワ アンジェリカ（ロシア連邦） | 国立メーチニコフ名称北西医科大学 病理学 臨床検査診断医 |
| 2. ショルコボイ エブゲーニー（ウクライナ） | ウクライナ内分泌代謝研究所 超音波検査 超音波専門医 |
| 3. グリゴロービッチ アルトゥール（ベラルーシ共和国） | プレスト州立内分泌センター 内分泌学 主任 |
| 4. リージコワ ユーリヤ（ベラルーシ共和国） | ゴメリ医科大学 産婦人科 准教授 |
| 5. ベケトワ バヤン（カザフスタン共和国） | セメイがんセンター 乳腺/婦人腫瘍学 副所長 |
| 6. クリクパーエバ アイヌル（カザフスタン共和国） | セメイ医科大学 総合診療科 助教 |

研修後の感想



Kozlova Anzhelika (コズローワ・アンジェリカ)

ロシア連邦 国立メーチニコフ名称北西医科大学
病理学 臨床検査診断医

2018年7月17日から8月16日まで私は長崎大学原爆後障害医療研究所と長崎大学病院におけるNASHIM研修プログラムを受講しました。

私たちのグループはチェルノブイリ原発事故や核実験による放射能汚染地域に住むロシア、ベラルーシ、カザフスタン、ウクライナの代表で構成されていました。この期間、私たちは被ばく医療と災害医療分野の指導的な専門家の18の講義を聴講しました。

座学のコースは甲状腺がんの問題と、その分子的見地、核医学、広島・長崎の原爆影響研究、同様に、チェルノブイリ・福島原発事故のことにあてられました。

放射線分子疫学研修室において私は実験の流れや、各種技術設備・機器の仕組みを知り、また、BRAF突然変異を持つ甲状腺乳頭がんの18症例の実験を行いました。

この専門研修において、高度に熟練した技量で私を支援くださったタチアナ・ログノビッチ助教とウラジミール・サエンコ准教授が実験実施の細部に至るまで最大限に知識を伝授し、技術的な問題の解決を援助してくださいました。そのおかげで全ての質問に対して完全かつ応用へと展開可能な回答を得ることができました。

言及するべきは、大変関心深い講義であり、社会的に重要で実践的な活動をされている山下俊一教授と高村昇教授のことです。

この二人の専門家は大規模な学術的な作業を行うのみならず、日本の様々な地域で放射線の啓もう活動をしています。

研修によって、日本で第二次世界大戦下に投下された原爆の身体的・心理的な影響があることを知りました。また、福島原子力発電所が自然災害被災の結果として水素爆発をおこしたことも知りました。

私にとって重要であったのは長崎県・市の首長、NASHIMの会長、長崎大学と、その大学病院の指導部の方たちへの表敬訪問でした。訪問先での対応の中で、私たちの研修への関係者であるという接し方、心底からの関心、また、私たちを通して、世界平和と軍縮へ向かう私たちの国の門出に祝福をしてくださる真心を感じました。

研修のオーガナイザーのご尽力により、私たちは長崎平和祈念館や長崎の史跡を訪れ、被ばく者の方との交流を持ち、長崎原爆73周年平和祈念式典にも参列することができました。

深い尊敬の念を引き起こしたのは、戦争で破壊された街を復興させただけでなく、常に世界のすべての国とその指導者に平和を呼びかけ、戦争と核兵器のない世の中を提唱し続けている日本人の方々の勤勉、忍耐、根気強さです。特に印象に残ったのは原爆資料館の見学説明をしてくださった嶺川洸さんという長崎原爆の証言者です。嶺川さんの語りはその真心とすべての民族に地球の平和と核廃絶を訴えようという意欲に満ちており、心の奥底に響きました。ご高齢にも関わらず、多くの被ばく者の方々が積極的な人生を送っているのはとても重要なことです。原爆資料館で平和案内人を務めたり、記念行事に参加したり、

自らの経験や知識を子供たちに伝えることもしていらっしゃいます。次世代に悲劇の記憶を留め、新たな戦争を起こさないことを、平和を尊重することを伝えるために、これはとても重要なことです。

放射能汚染の影響に関する講義から分かったことは、ベラルーシとウクライナのチェルノブイリ原発事故の事故処理経験と福島事故は、汚染地域からの住民の疎開、放射線からの防護、医学的に分類される事故影響に共通点があるということでした。

日赤長崎原爆病院の新棟を訪問しました。院長や看護師長から大変興味深い講義をお聞かせ頂き、院内のいくつかの施設を見学しました。私達は病院業務に関して子細な情報を得ることができました。特別な印象を持ったのは、血液内科に先進設備が整っていることでした。

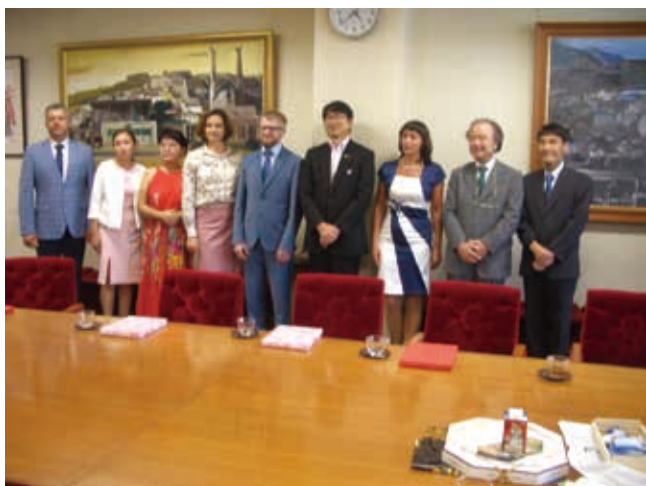
ホールボディーカウンター施設を訪問し全身の放射線を実際にスキャンして頂いたことがとても興味深いことでした。

オーガナイザーに特別に感謝したいことは、被ばく者である高齢者の暮らすホームを訪問させて頂いたことです。ホームのある場所は風光明媚であり、スタッフの皆さんの業務、入居者への介護に感動を覚えました。このような業務体制は、類似施設に対しての最良の模範となることと思います。

大村市で国立長崎医療センターの施設と業務を視察しました。病室やICUも見せていただきました。興味を引いたのは、被ばく者のアーカイブ保存業務でした。集積・保存されている情報量の多さに驚きました。センターの施設は免震構造となっており、地下施設でこの免震設備を見学したのは関心を引かれました。私にとって印象深かったのは、手術用機器、診療機器の先進性でした。特に手術室で3Dグラスをかけて立体的に手術を見学したことは鮮明な記憶となっています。

とりわけお伝えしたいのは、私達のグループは4カ国からのメンバーで構成され、講義や「長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM、ナシム）」のご手配による様々な会合で得た新たな情報や知識を習得するのにこの温かく友好的な関係が大変な助けになったことです。また研修以外の時間に日本、とりわけ長崎の文化、歴史そして伝統を学ぶ上でも同様でした。

このたび、長崎大学や原爆後障害医療研究所の専門家の方々の講義を拝聴できるというまたとない機会を頂き、この研修の参加のため訪日の招へいをしてくださった「長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM、ナシム）」に大変感謝しております。今回の研修で得た知識は今後の仕事に役立てていきます。日本滞在中や日本の方々に対する私自身の素晴らしい印象や思いをロシアに帰国後、同僚や友人たちには是非とも伝えさせていただきます。



長崎市長表敬訪問



被爆73周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典へ参列



Shelkovoï Yevhen (ショルコボイ・エブゲーニー)

ウクライナ ウクライナ内分泌代謝研究所
超音波検査 超音波専門医

私、ショルコボイ・エブゲーニー・アナトーリエビッチは、NASHIMの研修を原爆後障害医療研究所と専門研修を長崎大学病院で、2018年7月17日から8月16日の期間に受講しました。

NASHIMに研修への招へいと日本への訪問という素晴らしい機会を与えてくださったこと、そして、長崎大学原爆後障害医療研究所の先導的な専門家の講義を拝聴できたことに、感謝いたします。

この研修期間、私は広島と長崎の原爆投下の影響研究に関して、同様に、チェルノブイリと福島原発事故に関して聴講しました。

チェルノブイリ原発事故、セミパラチンスク核実験での放射能汚染の被害を受けた地域から来日したベラルーシ、ロシア、カザフスタンの同僚らとの出会いもありました。

研修によって、私は、広島・長崎の原爆投下による身体的・心理的影響に関する知識を得ました。

同様に、原爆後の被害者への医療支援の特色も知ることができました。

疫学の基礎や、疾病の分子的原因に関して知識を得たことの大切さを特に記すべきでしょう。

また、同様に、チェルノブイリ原発事故の影響研究における甲状腺がんの問題の基礎的な知識を得られました。

特に、山下俊一教授、高村昇教授の講義を特筆したいと思います。

専門家らの科学研究、社会活動の経験は日本のみならず、全世界の住民らの放射能からの保護水準を高めることに寄与しました。

長崎大学病院の第一内科での実地研修の機会が与えられました。

原発性アルドステロン症検査のための血管造影下副腎静脈採血に参加しました。

内分泌グループの皆さんには、業務への様々な助言と院内視察にご協力いただいたことに心より感謝いたします。

私に大きな印象をもたらしたのは、訪問した医療施設で最高の医療機器が装備されていることでした。

研修のオーガナイザーのご尽力で長崎原爆資料館を訪問しました。また、長崎原爆投下73周年平和祈念式典にも参加しました。

被ばく者と交流したあとの深い感銘を個別に記しておきたいと思います。

原子爆弾に関連する広い啓もう活動が悲劇の記憶を残し続けることに、そして、新たな原爆投下を許さないということに貢献しています。

最後に、タチアナ・ログノビッチ、ウラジミール・サエンコ氏の講義と研修時、また、オーガナイズ面における支援に感謝します。



Grigorovich Artur (グリゴロービッチ アルトゥール)

ベラルーシ共和国 ブレスト州立内分泌センター
内分泌学 主任

日本滞在の当初から、この国は忘れ難い印象を私の記憶に留めました。文化的であり、友好的であり、知的でテクノロジーの発展した先進国であり、古代からの伝統を守り続けることに長け、不屈の精神で多数の自然災害にも耐え、更なる発展への大きな展望を持つと言う素晴らしい国です。

長崎市、長崎県の首長の方々からNASHIM研修参加者への敬意を示していただいたことは、再度、放射能影響による後障害の問題が、重要な問題であり、官学のレベルで配慮されている事象にあることを強調していると言えます。

山下教授による放射線生物学と医学に関する講義は長崎から福島にいたるまでを網羅し、私にとって放射能汚染と、その人体に及ぼす影響の本質が明快になる講義でした。また、長崎県の被ばく者と福島の子供たちのスクリーニング調査に関する疫学的帰結を、説得力をもって、紹介してくださいました。

V・サエンコ准教授とT・ログノビッチ助教は原子力発電所事故後の放射線影響から甲状腺がんのケースの比較検証を詳細にプレゼンテーションしてくださいました。

学術的な結論は、私をしてより深く放射線後障害問題の本質、特に甲状腺がんへの影響を理解させるにいたしました。様々な住民の調査個体群によって放射線の後障害の程度、また、分子生物学的レベルで引き起こされる影響が違うということを理解しました。

福島の汚染地域での生活は平常化してきています。住民の以前の居住地への帰還事業の経験を、ご自身の講義で高村教授が話してくださいさり、チェルノブイリ・福島からの教訓としてご説明くださいました。

新棟がオープンした日赤長崎原爆病院への訪問は、高度に最先端の診療機器、診療ラボ、リハビリ施設などを視察し括目しました。私が特に驚いたことは、被ばく者の健康状態への配慮の水準の高さでした。また、被ばく者への健康調査制度も知るに至り、大変素晴らしいことと更に驚きを感じたのは、被爆者の寿命の長さです。それは、医療サービスの質の高さと、被ばく者支援の課題を遂行する上での健康保健支援制度の充実によるものであると思います。

柴田教授の疫学基礎講座によって私は入手する情報の分析の大切さを理解しました。分析なくして確実な結論を確定することは不可能であるということです。

歓迎会では、友好的な雰囲気の中、研修参加者や講師の皆さんと親交を深めることができました。

鈴木准教授、永山教授、松浦教授、李教授の講義により、遺伝子突然変異や遺伝子病を人々に引き起こす分子・遺伝子レベルでの放射線影響を理解することができました。『幹細胞を用いた移植は、肝臓や他の様々な疾患に有用である。』

部分的には矛盾点もありますが、この分野の学術的思考は未来の健康保健分野にとって最も先進的かつ展望のあるものです。臨床医である私が、学術研究の未だ知られざる領域の神秘を知る機会に恵まれたことを講師の皆さんに心から感謝します。

また、ホールボディカウンター室訪問では、私の体内に蓄積されている放射性物質のスクリーニングという減多にない機会をいただけて感謝します。

その日、原爆により被害を受けた罪なき人々に襲い掛かった怖い出来事の記憶を留める原爆資料館を訪問したことで、私は、心から亡くなられた方のご遺族、原爆を生き延びた方々に心からの哀悼の意を表し、また、非核化と平和な世界の理想を推進することに力を注ぐ方々に心から賛同の意を表します。

被ばく者らが暮らす老人ホームの訪問ではどのように介護を管理・実施しているかを見せていただき、また、原爆で被災した高齢者の方々に精神的なケアもなされていることを知りました。介護の水準は極めて高く、それは尊厳ある老後という人権を守っていると言えます。このことは、お年寄りたちが暮らすこの国への深い尊敬の念を呼び起こしました。

国立長崎医療センターの訪問は離島の住民を含む市民への医療支援の制度と水準を理解することに繋がりました。住民への医療提供をするための組織力の高さには驚きと感動を覚えました。高い技術を要する手術、科学的アプローチ、医師の研修は住民にとって利益となり、国全体の人口動態、出生率、寿命、死亡率を改善するものとなります。

福島の子供たちへのスクリーニング調査は甲状腺がんが罹患されている事実があり、日本国民が持つ危機に対する答えが最終的に解明されました。林教授の報告のなかで福島県の子供たちの甲状腺がんと発電所の事故との因果関係はないという証拠が提示されました。

専門研修では、大学病院の科学実験に参加し、近代的なアプローチや、証明医学の見地からの内分泌疾患の珍しい診断法を学びました。肥満患者、甲状腺がん、また、甲状腺機能亢進症、副腎疾患に関するディスカッションに参加しました。

8月9日には長崎原爆投下73周年の平和祈念式典にも参列しました。この出来事は私の胸中に深く記憶を留めました。特に印象に残ったのは原爆被害者である方の人生への姿勢、高齢であるにもかかわらず、核兵器廃絶の戦いに身を投じていることでした。市長により朗読された平和宣言は、日本の平和への意欲をそのまま体現していました。式典で注目したことは、国連事務総長のグテーレス氏と安倍日本国首相が参列したことです。そして、核兵器禁止条約を批准するであろう多くの国に向けて核廃絶を訴えています。

私がNASHIM研修で得た知識は医師の仲間たちに必ず伝えていきます。NASHIMの研修参加者になれたことを心から感謝します。 NASHIM ARIGATOU!



長崎原爆資料館にて



恵の丘長崎原爆ホームにて



Lyzikava Yulya (リージコワ ユーリャ)

ベラルーシ共和国 ゴメリ医科大学
産婦人科 准教授

2018年NASHIM招へいにより私は初めて日本を訪れました。第一印象は、空港で感じた、申し分のない秩序と好意的な我われへの接し方でした。

滞在中の瞬間々にこの素晴らしい国への印象がますます良くなるばかりでした。

NASHIMの皆様素晴らしい国を訪問させていただいたことを感謝します。離日するまでには私のこの土地の人間のような気分になっていました。

NASHIM研修は表敬訪問から始まりました。私にとってはこのようなハイレベルの首長の方々とお会いできるのは大きな名誉です。それぞれの首長の方が私たちに時間を割き、真心から私たちの感想に耳を傾けてくださいました。

人体への放射線の影響とメカニズムに関する講義は大変興味深く、引きつけられ、よく理解のできるものでした。長崎市内の医療機関の訪問は特に興味深く、私たちはすべての関心事に対して、回答を得ることができました。

特に強い印象を持ったことは、1945年8月9日の原爆を生き延びた方たちとお会いしたことでした。この出会いは永遠に記憶に残るでしょう。私は、このような惨事がもう二度と繰り返されないことを望みます。そして、日本の繁栄、平和を祈ります。

また、NASHIM研修のオーガナイザーの方々に研修に対する御礼を申し上げます。



日本赤十字社長崎原爆病院にて



長崎市原子爆弾被爆者健康管理センターにて



Beketova Bayan (ベケトワ バヤン)

カザフスタン共和国 セメイがんセンター
乳腺 / 婦人腫瘍学 副所長

2018年7月17日から8月16日。私はNASHIMの研修プログラム受講の6名の1人でした。

我われの研修は林田直美教授によるオリエンテーションから始まり、この研修の特徴、ナシム設立経緯、また、その目的と課題などを拝聴しました。

滞在第1週目に、長崎県知事、長崎市長、同様に、長崎大学病院幹部とNASHIM会長を表敬する名誉に浴しました。

私たちが聴講した講義項目はとても関心深いものでした。講師の方々は放射能汚染問題という今日世界で起こり得る焦眉の問題としての産業系災害に焦点をあてていました。チェルノブイリ事故の経験を踏まえ、放射能汚染の影響を回避あるいは最小化することができると感じました。

福島の悲劇はチェルノブイリの悲劇に比較し、人々の健康被害を著しく低い程度にとどめましたが、それは被ばく医療の全知識を活用したからです。

全講師の方々が大変興味深いお話をしてくださいました。特に、山下教授の西海研修の実施、ご家族のご厚情に心より感謝いたします。

同様に、被ばく者への手厚い支援がなされており、その恩恵によって平均寿命が日本国民の全体の平均寿命に劣らない長寿であることは、私にとりまして新しい知識でした。

私たちは被ばく者への検診・治療にあたるいくつかの医療施設を訪問させて頂きました。7月26日の原対協・市健診センター訪問では被曝者の健康管理のために年2回の診療を行っているとのことがありました。そして被曝者の利便性のために長崎市内113か所に診療チームが回診に訪れるとのことでした。このような活動によって、100歳以上の方が128人、そして最高齢が111歳であるとのことでした。

日赤長崎原爆病院の訪問時には、病院長の平野医師が病院設立の歴史と今日の事業に関して、同様に、現在起こっている自然災害対応での病院スタッフの派遣支援のお話をしてくださいました。

忘れがたい印象をもたらしたのは、原爆資料館の訪問であり、特にボランティアで平和案内人をされていた嶺川洸さんでした。1945年8月6日、9日に起こった悲劇は、もう二度と繰り返されてはならないのです。原爆がもたらしたこの教訓は、世界が“原子力の平和利用”のみを扱うように、次世代に受け継がなくてはなりません。

被ばく者の暮らす恵の丘原爆ホームを訪れ、そのうちの一人の方とお会いしました。この方の悲劇の一日のお話に耳を傾け、70年以上が経ったとはいえ、今も近親者を失った痛みは昨日のことのようであることを理解しました。

最後の2週間に、外科と産婦人科のお仕事を知る機会を得られました。医師のカンファレンスにも興味深く同席しました。そこでは医師らが、手術の経過を含む素晴らしい手書きイラストを用いて、自身の診療ケースを報告していました。これは大変関心をひかれました。

私は、当該研修の参加への招待をくださったNASHIMに大変感謝しております。私が研修で得た知識は必ず、カザフスタンで活かしてまいります。

研修のオーガナイザーには心から感謝します。すべてがよく考察されており、宿舎にいたるまで大変良かったです。宿舎は観光客が訪れる名所にも徒歩で行ける近さであり、もちろん海岸に近いことがとても嬉しいことでした。

日本の国民の方たちが私には忘れられない印象として残りました。多くの国を訪れましたが、日本人よりも教養があり、寛大で、善良な国民は、自身の人生で未だ見たことがありません。この驚異の国の更なる発展を願い、この日本への訪問が最後とならないことを心から願います。



Krykpayeva Ainur (クリクパーエバ アイヌル)

カザフスタン共和国 セメイ医科大学
総合診療科 助教

2018年夏NASHIMプログラムにより長崎大学の原爆後障害医療研究所および大学病院での研修を受ける機会を得ました。私たちのグループはロシア、ベラルーシ、カザフスタン、ウクライナの代表で構成され、それぞれチェルノブイリ原発事故や核実験の放射能汚染地に居住地を持つ様々な専門の医師たちです。

私達は、研修中、放射性物質安全対策、甲状腺がんの問題、広島・長崎の原爆後の影響、また、チェルノブイリや福島の原子力発電所事故の影響に関して、長崎大学をけん引する専門家の大変興味深い座学を受講しました。

オーガナイザー、講師の皆様の社会実践活動は大変重要なものでありまた非常に高水準であると言えます。専門家の方達は重要な学術研究を行うのみならず、日本の各地で放射能安全対策の啓もうを行っています。

先生方は福島原子力発電所の事故に際し被災者救済に尽力する活動をお話してくださいました。チェルノブイリ事故処理にあたったベラルーシとウクライナの経験と福島の事故は、放射能からの保護、汚染地域からの住民避難、医学的見地からの後障害の問題において類似点があります。

研修により私は第二次世界大戦下の日本への原子爆弾投下における身体的・心理的後障害について、また、自然災害から誘発された福島原発の水素爆発について知識を得ることができました。

また、研修主催者のご尽力により、私たちは長崎原爆資料館を訪問し、また、第73回平和祈念式典にも参列し、原爆の地獄と悲劇を生き延びた被ばく者の方々と触れ合うこともできました。

深い尊敬の念を呼び起こしたのは、日本の皆さんの勤勉と忍耐力です。戦争で破壊された町を復興しただけではなく、世界の国々に、また、自国の指導者らに、平和と核兵器のない世の中を訴え続けているからです。

大変重要であると思ったのは、ご高齢にも関わらず、多くの被ばく者の方々が人生を送るにおいて積極的な姿勢を保ち続けていることです。原爆資料館で平和案内人として働き、記念行事に参加し、自らの経験や知識を子供たちに伝えています。これらのこと全てが、あらゆる世代に、悲劇の出来事の記憶を留め、新たなる戦争を回避し、平和を尊重するために、とても重要なことです。

長崎県大村市所在の国立長崎医療センターを訪問しました。大変印象に残ったのは病院や手術室の設備

が、高度先進的医療機器やヘリコプターなどの航空輸送機器で充実しており、救急医療の必要な患者の搬送をじん速に行うことが可能であるということなどでした。

これにより大学の学生や若い医師らの研修が世界水準で実施されることを可能としています。若手の医師らは大変几帳面かつ精励な姿勢で、強い責任感を持って仕事に取り組み、綿密に準備し、新しい手術法を用いて患者の手術を実施しています。

また、日赤長崎原爆病院の新施設を訪問することもできました。高い技術を誇る医療サービスが患者に提供されており、特に被ばく者の医療支援は特筆するべきです。また、被ばく者のための老人ホームも訪問しました。そこでも同様に、看護、支援が高齢者に提供され、精神的にも物理的にも支援されていました。

私は長崎大学原爆後障害医療研究所の腫瘍診断・病理研究室の研究作業に参加させて頂くことができました。分子遺伝学の基礎とパラフィン包からのDNA抽出、シーケンス解析、ドロップレット法などの様々な診断法をご教授いただいた中島正洋教授とジャンナ・ムサジャノヴァ助教に心より感謝申し上げます。

私は日本訪問と長崎大学や原爆後障害医療研究所の専門家による講義を拝聴する素晴らしい機会を与え招へいして下さった「長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 (NASHIM、ナシム)」に心より感謝申し上げます。研修中に得た知識は今後、セメイ医科大学の学生の教育のために役立たせていただきます。この他国にない慈しみある美しい国にととも感銘を受けました。そしてこの心象と滞在中の思いを是非ともカザフスタン共和国セメイ医科大学の講師や同僚の医師たちに伝え分かち合いたいと思います。同時に両国の更なる友情のために尽力していきたいと思います。



国立病院機構長崎医療センターにて



放射線影響研究所長崎にて

香焼中学校と三和中学校で出前講座を開催しました

【出前講座とは？】

長崎でこれまで培ってきた「ヒバクシャ医療の国際協力」や「放射線被ばく医療」等について、長崎の小中学校生徒に分かりやすく説明することにより、生徒たちの科学や医療への興味・関心を促し、放射線医療科学を通じた国際貢献等に寄与する後継者の育成につなげるため、長崎大学の先生方が小中学校を訪れて講義を行います。



今年の第1回目は6月19日に長崎市立香焼中学校で開催しました。1年生24名を対象として、長崎大学の三根眞理子 客員教授がアニメーションやクイズを交えながら「長崎原爆の話・原爆直後の救護活動と調査」の講義を行いました。



第2回目は6月26日に長崎市立三和中学校で開催しました。1年生54名を対象として、長崎大学の松田尚樹 教授が「放射線って何？－身近な放射線の話」の講義と簡易型放射線測定器を使った実習「測ってみよう放射線」を行いました。生徒さん達は、身の回りのモノはもちろん、学校の同級生や先生方の身体から放出される放射線を測ることもできました。

出前講座の詳細は、NASHIMのホームページ (<http://www.nashim.org/>) をご覧ください。